

古代中国にUFOは飛来していたか？（其二）

—— 古典文献の基本的な使い方からの考察 ——

明 木 茂 夫

（承前）

三、貝の化け物？UFO？ 『夢溪筆談』『異事』

四、蘇東坡の目撃したUFO？ 蘇軾「遊金山寺」詩

小論は中国古典の中の空飛ぶ物体に関する記述を以て古代中国にUFOが飛来していた証拠だとする論に対して、UFOの存在の真偽そのものを云々する以前に、まずその漢文の原典に当たってそうした主張に論証の不備や不当な誘導がないかを検証しようとするものである。前稿（其一）^①では『晋陽秋』と『呉友如画宝』を取り上げた。

小論の執筆中、最近刊行された『新・トンデモ超常現象56の真相』^②で加門正一氏が、「うつろ舟」の伝説に対して実に興味深い検証を行っておられるのを見出した。この「うつろ舟」は江戸時代の享和三年（八〇三年）に常陸の国の海岸に美しい異国の女性一人が乗った円形の舟が流れ着いた、というもので、『兎園小説』などの古書に絵入りの記録が残されている。作家澁澤龍彦も題材に取り上げているので有名で、^③お椀を伏せたような円盤型の船体といい、上部にガラス窓がついている点といい、中から見つかった未知の異国の文字といい、これが現代に言うUFOと同じ物だ、と好事家がいかにも飛びつきそうな話である。澁澤は『兎園小説』のみに基づいているようだが、加門氏は『兎園小説』『弘賢隨筆』『梅の塵』の記述、さらにはこれらに先行する文献を詳細に検討され、これが「当時知られていた『うつろ舟』伝説をもとに」、「實在・架空の名前」を「巧妙に組み合わせ」せて、「実話を装って創作であることを隠」した、「なかなかよく出来た話」であることを論証されている。

この本の著者紹介によると加門氏は大学の専門科目以外に教養科目の一部で懐疑思考（Skeptical Thinking）の講義をしておられ、その教材

収集として超常現象の科学的調査をなさっているという。小論は到底加門氏の水準の足下にも及ばないが、同じような問題意識の先行研究があったことに私も大変意を強くすることができた。

では前回に続き、今回は北宋の沈括の『夢溪筆談』と蘇東坡の「遊金山寺」詩を中心に取り上げてみることにしよう。

三、貝の化け物？ UFO？ 『夢溪筆談』「異事」

次は北宋の沈括『夢溪筆談』巻二十一「異事」に記された「揚州明珠」である。

嘉祐中、揚州有一珠甚大、天晦多見。初出於天長縣陂沢中、後転入甕社湖、又後在新開湖中、凡十余年、居民行人常常見之。予友人書齋在湖上、一夜忽見其珠甚近。初微開其房、光自吻中出、如横一金線、俄頃忽張殻、其大如半席、殻中白光如銀、珠大如拳、爛然不可正視、十余里間林木皆有影、如初日照、遠処但見天赤如野火。条然遠去、其行如飛、浮於波中、杳杳如日。古有明月之珠、此珠色不類月、熒熒有芒焰、殆類日光。崔伯易嘗為明珠賦。伯易高郵人、蓋常見之。近歲不復出、不知所往。樊良鎮正当珠往來処、行人至此、往往維船數宵以待現。名其亭為玩珠⁽⁵⁾。

嘉祐中、揚州に一珠の甚だ大なる有り、天晦^{くも}ければ多く見ゆ。初め天長縣の陂沢中に出で、後に転じて甕社湖に入り、また後に新开湖中に在り、凡そ十余年、居民行人^{たみびと}常常之を見る。予の友人、書齋湖上に在り、一夜忽として其の珠の甚だ近きを見る。初め微かに其の房を開き、光吻中より出で、横一金線の如く、俄頃^{にはかに}忽として殻を張り、其の大なること半席の如く、殻中の白光銀の如く、珠の大なること拳の如く、爛然として正視するべからず、十余里の間林木皆影有り、初日の照らす所の如く、遠処但だ天赤野火の如きを見るのみ。条然として遠く去り、其の行くや飛ぶが如く、波中に浮き、杳杳たること日の如し。古に明月の珠有り、此の珠、色月に類さず、熒熒として芒焰有り、殆ど日光に類す。崔伯易嘗て明珠の賦を為す。伯易は高郵の人、蓋し常に之を見るならん。近歲復た出でず、往く所を知らず。樊良鎮正に珠の往來する処に当たり、行人^{たみびと}此に至るに、往往にして船を維き數宵以て現るるを待つ。其の亭を名づけて玩珠と為す。

これが全文である。これに対して『文化故事』⁽⁶⁾は次のように述べる。

宋代の有名な科学者沈括^{しんかつ}が「夢溪筆談」^{むけいひつだん}の中にすばらしい記録を残している。それは、宋代の嘉祐年^{かゆう}（紀元一〇五六年）のことである。揚^{よう}

州に巨大なカラス貝が時々、夜の海に現われていた。付近の住民は、その貝を十何年もの間見てきたが、ある夜のこと、沈括の友人が湖に舟をだして読書をしていたら、突然、その巨大なカラス貝が、近くで口を少し開け、一筋の金色の光を放ったのである。しばらくして、カラス貝が大きく口を開けると、銀の光が一面を覆った。その輝きといったら、一〇キロ四方の土地を朝日のように照らし、遙か遠くの空の果てまで、野火に燃やされたように真っ赤になったほどであった。それからカラス貝は水上をすばやく動きまわり、あっという間に姿を消してしまったという。

科学者とか学者は、物事を厳密に考えるから、普通ならば沈括先生もこのことについて、書くはずがないだろう。そして、おもしろいことに、同時期の学者王象之も「輿地紀勝」の中で似たようなことを書きのこしているのである。「洞庭湖に巨大なカラス貝が現われた。大きくて舟のように見える。夜中に、まるで帆を張るように、貝が開いた。体中に明珠が光り、太陽と月のように輝いて、波の中を出入りする。」と。

なるほど、空飛ぶ円盤を古人が二枚貝の化け物と見た可能性はある。早速『文化故事』による原文の訳文（抄訳）を細かく検討してみよう。まず「宋代の嘉祐年（紀元一〇五六年）」とあるが、原文は「嘉祐中」で「嘉祐年間」と訳すべき所である。当然幅があり、正しくは一〇五六年～一〇六三年。また「夜の海に現われていた」というのも変だ。揚州は海に面してはいないし、このお化け貝が出没したのは陂沢や湖である。「珠」はここでは真珠を産する貝。『文化故事』はこれを「カラス貝」としておられるが、梅原郁氏の訳注では「真珠貝」、また李文沢・呉洪沢氏の口語訳（中国語）では「珠蚌」と訳しておられる。さらに「友人が湖に舟をだして、読書をしていた」はやはり「書斎が湖のほとりにあった」（湖の上）のであろう。梅原氏の訳も「私の友人の書斎がその湖の畔にあり」となっているし、後で触れる『文昌雜錄』では「湖辺」とある。

しかしこの箇所が一番問題なのは、原文に訳されていない部分があることである。原文に「其の大なること半席の如し」とあるのが省略されているのだ。もちろん『文化故事』のこの部分は原文の全訳ではなく、抄訳により内容をかいつまんで紹介しているだけだということは可能であろう。しかしよくごらんいただきたい。原文は「その大きさは席半分」なのである。ムシロ半分……日本風に言えば大雑把にタタミ半畳ほど、と言ってよいだろう。

もしこれが貝ならば半畳というのは立派な化け物である。しかしこれがUFOだというのなら、半畳というの小さすぎはしないか？ 宇宙人の中にはとても小さい者もいるのだろう、と弁護してはならない。『文化故事』の作者は「現在のいわゆる空飛ぶ円盤とほぼ同一の物」が古代中国にも飛来していたと述べ、後でUFOに連れ込まれて身体検査を受けたというヒル夫妻事件を紹介している。宇宙人ばかりか生身の地球人も乗るにしては、やはりタタミ半畳では窮屈だ。

似たようなことを言っている人は他にもいて、「夢溪筆談」的の神奇飛珠⁽⁹⁾で呂応鐘氏は

自然界的魚蚌之珠絶不会「其大如半席」、：

自然界的魚蚌の珠は絶対に「其の大なること半席の如し」であるはずがなく、

四

と述べておられる。だからUFOなら小さすぎるでしょ？「半席」というのは誇張表現だから正確な大きさではない、と言われればそれはそのとおりだが、宇宙人の乗り物たるUFOを「半席」と表現しているということは、むしろ実物(?)より小さいイメージになっていることは否めないと思うのだが。それに大きさが「半席」なのは貝の中の真珠ではなく、殻を広げた貝そのものである。

冗談はさておきやはり私がひっかかるのは、『夢溪筆談』の記述をUFOだと言うためにはタタミ半畳というのが不利な証拠となる、ということだ。このままでは自説に不利な情報を読者の目から隠蔽している、と取られても仕方あるまい。原文のその後に、貝が殻を開くと中に輝いていた真珠の玉が拳大であった(珠の大なること拳の如し)とあるのも、貝全体の大きさが半畳というのと整合性がある。前掲の梅原氏は「大きさは席半分くらいで」と訳しておられるし、李文沢・呉洪沢氏の口語訳でも「有半張席子大(席子半枚ほどの大きさであった)」となっている(言うまでもないが梅原氏の訳注書も李文沢・呉洪沢氏の現代語訳も純粹に学術的なものであり、UFOには全く関係ない)。ちなみにこの『夢溪筆談』の記述をやはりUFOの証拠として紹介している中国のウェブページ「正見∨宇宙時空∨古代科学∨湖上明珠・古代飛碟」でもこの記述を現代中国語に訳しておられるのだが、問題の部分はちゃんと「望去有半張席子那麼大」(見ると席子半枚ほどの大きさであった)と訳しておられるのである。

但し、余談だがこのウェブページにしても、その挿絵があまりにも原文のイメージからかけ離れているように思う。これは「貝の化け物」の話ではなく「UFO」であることを前提として描かれてるよう思えてならないのだが、読者はどう感じられるだろうか？(図1)すぐ後ろにうっすら見える樹木と比較すれば、大きさについては「半席の如し」に忠実に描いてあるようだ。ちなみに「飛碟在中国(UFO in China)∨古代中国的UFO記録∨揚州明珠」に掲載されている挿絵は図2の如くである。

さらに『文化故事』の「科学者とか学者は、物事を厳密

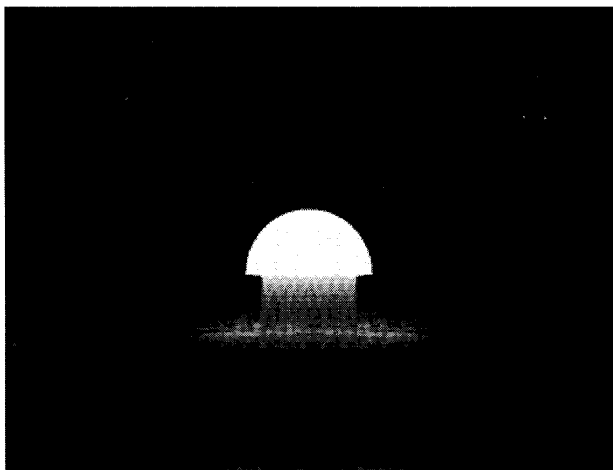


図1



図2

に考えるから、普通ならば沈括先生もこのことについて、書くはずがないだろう」という記述もどうもひっかかる。よく見ていただきたい。この話が掲載されているのは『夢溪筆談』の巻二十一「異事」である。確かに沈括は当時随一の大学者だが、「異事」の巻、つまり「不思議な出来事」の巻に不思議な出来事が書いてあることは当たり前なのである。学者が当時の神話・伝説・怪談の類を丹念に記録していたとしてもべつに問題はなからう。中国の文人にはこれも守備範囲である。

それに『夢溪筆談』には不思議な話ばかりが書かれているのではない。誤解無きよう。ちなみに『夢溪筆談』の全ての巻名は

故事、弁証、楽律、象数、人事、官政、権智、芸文、書画、技芸、器用、神奇、異事、誤謬、譏諷、雜誌、藥議

となっている。UFOを論じている『文化故事』が「宋代の有名な科学者沈括」とおっしゃっているのは決して間違いではないが、しかしこの巻名を見ただけでも『夢溪筆談』で論じられているのは自然科学や怪談話ばかりではないことはお分かりであろう。伝統的な哲学思想・学問・芸術もきちんと基礎に据えられている。前掲『夢溪筆談』第二冊「解説」で梅原郁氏は

六百九条を大まかに分けると、政治、経済、法律などの諸制度（約一百七十）、個人の逸話や民間の伝聞、異事など（約一百十）、考古学、言語学、音楽などの記録（約一百十）のほか、残りの三分の一以上にあたる約二百十条が自然科学ないし科学技術に関する記述で占められている。

と述べておられる。さらに第三冊「沈括略伝」では

なるほど沈括は、経学、詩文或いは歴史という、伝統的知識人の教養、知識の枠組以外に、自然の綿密な観察による新しい発見、先入観にとらわれぬ合理的な解釈、などによって、自然科学の分野で偉大な足跡を残した。しかし、それは彼一人に、突然変異的に賦与された才能のたまものなのでは決してなかった。

と解説しておられる。沈括は純粹な科学者だったのではなく、伝統的な学問体系以外に、今日にいう自然科学に抜きん出た点が重要なのである。

『文化故事』の続きを検討していこう。『文化故事』が引用しておられる南宋の王象之撰『輿地紀勝』の原文は卷六十九「荊湖北路 岳州 景物下」の「巨蚌如舟」の項にあった。原文は次の通り。

洞庭有巨蚌如舟、深夜帆展一殼、往来煙波間、吞吐明珠与月爭輝。

漁者百計取之、卒莫能得。

洞庭に巨蚌の舟の如き有り、深夜一殼を帆展し、煙波間に往来し、明珠を吞吐し月と輝を争ふ。漁者百計もて之を取らんとするに、卒に能く得る莫し。

確かに「似たような」話である。しかし、『文化故事』は見落としておられるようだが実は『夢溪筆談』と「同じ記録」がこの『輿地紀勝』に記載されているのである。卷四十三「淮南東路 高郵軍 景物下」に「玩珠亭」とあり、

在樊良鎮。嘉祐中、楊州天長陂沢中有一珠甚大、天晦多見。後転入
 甕社湖或在新開湖。凡十余年、居民行人常見。鎮正当珠往來之處、
 行人往往維舟以待其現。名亭為玩珠亭。

(玩珠亭は) 樊良鎮に在り。嘉祐中、楊州天長の陂沢中に一珠の甚
 だ大なる有り、天晦ければ多く見ゆ。後に転じて甕社湖に入り或い
 は新开湖に在り。凡そ十余年、居民行人常見。鎮正に珠の往來
 するの処に当たり、行人往往にして舟を維ぎ以て其の現るを待つ。
 亭を名づけて玩珠亭と為す。

と記されている。文章も『夢溪筆談』を抄録したものであろう。さらに北宋の龐元英の『文昌雜錄』巻四にも同様の記録が記載されているのであ
 る。⁽¹⁵⁾

礼部李侍郎説、秘書少監孫莘老莊居在高郵新开湖边、嘗一夕陰晦、
 莊客報湖中珠見、与数同人行小草径中、至水際見微有光彩、俄而光
 明如月、陰霧中人面相覩、忽見蚌蛤如蘆蓆大。一殼浮水上、一殼如
 張帆狀、其疾如風、舟子飛小艇競逐之、終不可及、既遠乃没。

礼部李侍郎説く、秘書少監孫莘老、莊居高郵新开湖边に在り、嘗て
 一夕陰晦なるときに、莊客湖中に珠見はるるを報じ、数同人と小草
 の径中を行くに、水際に至るに微かに光彩有るを見、俄にして光明
 月の如く、陰霧中に人面相ひ覩、忽として蚌蛤の蘆蓆の如く大なる
 を見る。一殼水上に浮き、一殼帆を張るの狀の如く、其の疾きこと
 風の如く、舟子小艇を飛ばし競ひて之を逐ふも、終に及ぶべからず、
 既に遠く乃ち没す。

『文昌雜錄』でも大きさが「蘆蓆の如く大」となっていることは注目すべきであらう。正体は分からないが大きさの印象は共通している。『輿地
 紀勝』巻六十九の「舟の如し」は大きさではなく、帆を立てるように上の殼を立てる様子のことであらう。巻四十三には大きさの記述は省かれて
 いる。

『文昌雜錄』によると『夢溪筆談』に言う湖畔に書齋を持つ友人は秘書少監孫莘老である。孫覺、字は莘老。蘇東坡の詩歌にも登場する人物で
 ある。⁽¹⁶⁾既に触れた中国のウェブページ「正見」の「湖上明珠・古代飛碟」でも

湖上明珠事件最初出現在一个讀書人夜間苦讀之時、這讀書人就是土
 生土長在高郵的孫覺。他在看到明珠活動的当年、就金榜題名、考中
 進士、後來在朝中做了大官。

湖上の明珠の事件は、最初ある讀書人が夜苦学している時に現れた
 もので、その讀書人とは高郵で生まれ育った孫覺その人である。彼
 は明珠を目撃したその年、金榜に名を連ね進士となり、後に朝廷で
 大官となった。

と述べておられる。その論拠はこのページでは明示しておられないが、『文昌雜錄』によるのであろう。

さて右で見た『夢溪筆談』、『文昌雜錄』、『輿地紀勝』卷四十三（卷六十九も含め）を考え合わせると、当時このあたりにこのような不思議なものが出没するのはかなり有名な話になっていたことが窺える。特に地誌、名勝、その土地を詠った詩歌などを各地方ごとにまとめた地理書である『輿地紀勝』に、もっぱらこの明珠を見るための「玩珠亭」という建物のことが掲載されているのは、この地方のよほど有名な観光名所となっていたのであろう。不思議なものに対する好奇心は今も昔も変わらない、ということか。

これらに共通したこの「明珠」の特徴が、タタミ半畳ほどの大きさ、水面をかすめるようにかなりの速度で飛ぶ、明るい光を放つ、といったことであるのを考えれば、やはりこれは素直に考えて貝の化け物の話だと考えるのが順当ではなからうか。これを「現在のいわゆる空飛ぶ円盤」と考えるにはまずちっとも空を飛んでいないし、大きさも小さすぎるし、他の生き物が乗り込んでいるものとも見えないのである。それにいくら早く飛ぶと言っても、「船で追いかけてもとうとう追いつけなかった」（小艇を飛ばし競ひて之を逐ふも、終に及ぶべからず）と形容される程度の早さであって、時速何百キロ、マッハ幾つ、というような速度とも思えない。では光を放つような巨大な貝がいるのか、というと、実はそれも問題が違う。問題はまず当時の人たちがどういう話としてこれを記録したか、ということである。当時の人たちは貝の化け物と考えていた話を、いや実はUFOだと覆すほどの証拠は今のところない。要はやはり冷静に確実に文献を探し、それをまず客観的に解釈することが基本である。ゆめゆめ自分に都合の悪い情報を隠蔽してはならない。

四、蘇東坡の目撃したUFO？ 蘇軾「遊金山寺」詩

続いて蘇軾の「遊金山寺」詩を取り上げよう。これも中国のUFO研究ウェブページなどで、有名な文人が目撃した信頼性の高いUFOの証拠としてよく言及されるものである。『文化故事』による解説から見えていこう。

宋代の名詩人蘇軾は、沈括に比べてもっと運がよかった。というのも、彼は、鎮江の金山きんざんで不明飛行物を見たのだから。そして「遊金山寺」と題する詩にその時の経験を書きしるした。

是時江月初生輝、…最初、川に掛かっている月の光が明るかった。

二更月落天深黒。…夜中になると月がかくれて暗くなった。

江心似有炬火明、…ふと、川の真ん中が、たいまつを照らしたようにあかるくなった。

飛焰照天栖鳥驚。…炎が空まで赤く染めたので、ねむっていた鳥が驚いた。

帳然歸臥心莫詛、…ぼんやりと床についても、さっきの出来事が気にかかる。

非鬼非人意何物？…鬼でもなく、人間でもない。それはいったいなんなのだろう。

以上の記録は、単なる詩人のファンタジーではないことを示すために、彼はわざわざ「夜、たしかに見た」と注釈をつけている。

この部分には少々間違いが多すぎる。重箱の隅をつつくようで気が引けるが、読者のために敢えて訂正を行いたい。まず蘇軾とは何事か。蘇東坡の名は軾である。「蘇てつ」なら弟の蘇轍であろう。また詩の引用部分もあまりに誤字が多い。参考のために下に『中国詩人選集 蘇軾』の小川環樹氏による訳文を付しておこう。

是時江月初生輝、…ちようど江上に出ていたのは三日の月だったが、

魄

二更月落天深黒。…宵のうちに沈んで、まっくらやみになった。

江心似有炬火明、…川の中ほどに、とつぜん、たいまつのようにかがやく光が出た。

飛焰照天栖鳥驚。…舞いあがる焰は山をあかあかと照らし、ねぐらのからすも驚きさわいだ。

山棲鳥驚

帳然婦臥心莫訳、…私は何とも見分けえず空しい心で寝についた。

悵 識

非鬼非人意何物？…あれは鬼のしわざでもなし、と言って人工でもなかった。はたして何ものであったか。

竟

これだけ間違っていると読者に詩意が伝わらないのではないか。まず「生魄」は『礼記』の「月三日而成魄⁽¹⁹⁾」というのを踏まえて陰暦の三日の月のことである。よってここは是非とも「生魄」でなければならぬ⁽²⁰⁾。「栖」は「棲」の異体字だが、原文も「棲」だし、表記を日本の通行字体に合わせるといふ点からも「棲」とすべきであろう。「驚」が「惊」になっているのは明らかに中国語の略字（簡体字）からの誤りである。著者が手書き原稿でうっかり中国の略字（簡体字）を書いてしまったのを、出版社がそのまま作字したものとされる。確かに「驚」の略字体ではない「惊」という文字も存在するが、音は「りよう」であり元来別字である。「識」が「訳」になっているのも同じ理由で、原稿が中国の略字「识」となっていたのを出版社が日本の「訳」という常用漢字にしてしまったに違いない。これらは是非とも日本の字体に統一していただかないと日本の読者には読めない。また驚いて騒いだのはねぐらの「鳥」ではなく「鳥^{からす}」である。『文化故事』のいう「夜、たしかに見た」という自注の原文は「是夜所見如此（この夜見し所は此の如し）」。

口語訳についても「是時」は「最初」ではなく「この時」、「月落」は「月がかくれて」ではなく「月が沈んで」であろう。著者ははっきり断ってはいないが、これはもっと長い詩の一部分であり、「この時」はその前の詩句を指しているのである。少々誤字があっても内容としてこれがUFOであることに影響はないではないか、などと言ってはならない。人を驚かすようなことを主張したければ、まず文献の引用と解釈はなるだけ正確に、というのが小論の主旨である。

さてこの記述をどう見るか。これも「江心炬火の明有るに似たり、飛焰山を照らし棲鳥驚く」というたったの二句のみに依拠し、傍証なしに論じても結局水掛け論になりそうだが、この謎の光が川面で光っているだけで飛行ないし浮遊はしていない点、その光も発光体というよりむしろ炎を上げて燃えている感じである点から、どうもUFOだと簡単には言えないように思う。ではこの不思議な光の正体は何なのかと言われても困るが、人魂・狐火・鬼火あるいは不知火に類する話だと見る方が自然だろう。もちろん片っ端から否定するつもりはないのだが。ちなみに中国で一般向けによく使われている「鑑賞辞典」の類にこのような解説があるのを見付けた。

炬火、本指束葦而焼の火炬、但这里顯然不是、因為它那麼明亮、那麼突然、甚至光焰照山、驚動棲鳥、這的確有點奇怪。但古人对此現象也有所記載、木華『海賦』：「陰火潛然」。曹唐『南游』：「漲海潮生陰火滅」。這大概就是所謂的「陰火」、或許是由某些會發光的浮游生物聚集水面而形成。

炬火とはもとと葦を束ねて焼くたいまつだが、ここは明らかに違う。あまりに明るくあまりに突然で、山を照らしぬぐらの鳥を驚かしさえしているとは、確かに不思議である。しかしこの現象に対しては古人の記載もある。木華の『海賦』に「陰火潛然たり」、曹唐の『南游』に「海は漲り潮生じ、陰火滅す」とある。これも恐らくいわゆる「陰火」か、もしくはある種の発光する浮遊生物が水面に集まって形成したものであろう。

不思議な現象の記述に合理的説明を与えようと苦勞されているようだが、さすがに名詩鑑賞辞典だけにオカルト的な解釈は取っていない。

また川口秀樹氏は「中国科学説話雑識2」の「附・謎の発光体」でこの蘇東坡詩に言及して、

その光が、蘇軾には全く得体の知れないものであり、彼が少なからず恐怖を感じたのは、確かな事だと考えてよいでしょう。しかし、浙江あたりでは揚子江の川幅はとてつもないものですから、目撃者・蘇軾と発光体の距離はかなりあったはずです。…と、興味深く且つ冷静に述べておられる。

このように私が考える根拠というのは、これがもっと長い古詩の一部だという点である。全体を見渡すのと一部分だけを切り取って見るのとでは、ずいぶんイメージが変わることもあり得る。この「遊金山寺」は蘇東坡が三十六歳の時、杭州に通判として赴任する途中、潤州の金山寺に立ち寄った時の詩である。金山寺は長江に浮かぶ島に作られた寺で南朝時代の建立。詩はこのように始まる。訳は小川環樹氏による。

我家江水初發源…私の郷里は長江のみなもとを発する処にある。

宦遊直送江入海…そして官吏となった身はそのまま長江が海へそそぐ辺までついて来た。

そして『文化故事』が引用している部分の続き、詩の結びは

江山如此不帰山…私は美しい山川をながめながら故郷へ帰ろうともししていない。

江神見怪驚我頑…だから長江の神は怪（くま）を見せて、私のかたくなな心を戒めるのであろう。

我謝江神豈得已…神様におわびを申しましよう。私は好きこのんでこんな風にやってるのじゃありません。

有田不帰如江水…郷里には田畑もあるのだし、きっと帰らずには居ますまい。

となっている。不思議な光を見た蘇東坡は、これを長江の神が自分を戒めようとしているのではないかと感じ、故郷を捨てて異郷へ官吏として赴く我が身を省みて、望郷の感懷を述べているのである。現代人から見ると、不思議な光を見たことが望郷の想いに結びつくのは唐突に感じられるかもしれないが、旅の途中の詩に望郷が出てくるのはある意味中国の詩歌のパターンのひとつである。

さらにこの詩には金山寺周辺の観光名所が幾つもちりばめられている。

聞道潮頭一丈高…うわさに聞く、「海の潮のさきは一丈の高さにも達する」と。

天寒尚有沙痕在…今は冬だが沙に残る水跡がくっきりと在る。

「潮頭一丈高」とは、大潮の日などに上げ潮が大きな波となって河をさかのぼってくる「海嘯^{かいしやう}」という現象のことで、⁽²³⁾話には聞いていたが今も河岸の砂にその爪痕がまだ残っている、と言うのである。この詩には他にも名水の湧く「中冷泉」という泉や、その南にある「盤陀石」という座禅石など、観光名所が巧みに織り込まれている。さらに金山寺の僧侶に舟で付近を案内してもらい、「遅くなりますから帰りましよう」という蘇東坡に対して僧侶は「まあまあ」と懇ろにとどめ、夕日を見て帰りましようと言う（羈愁晩を畏れて帰楫を尋ねれば、山僧苦^{ねんく}に留めて落日を看しむ）。その夕景の描写も巧みである。

微風万頃靴文細…やがて微風がおこり広大な水面にちりめんのようなしわがより、

断霞半空漁尾赤…中空にたなびく夕焼け雲はさかなの尾の赤さを見せる。

海嘯、名泉、座禅石、山景、夕景、不知火、そして望郷…紀行文としてのお膳立ては十分である。この詩は紀行の詩、旅日記、観光案内の詩として読者に読まれることを意識して作られたものである。確かに不思議な光のことが記されているが、ここだけ全体の文脈から離して読むだけの要素はあまりないように思われる。

この蘇東坡の詩を以てUFOの証拠だと述べておられるのは『文化故事』のみではない。例えば呂応鐘⁽²⁴⁾氏は「UFO五千年史——中国古書中の⁽²⁵⁾

不明飛行物体記録」の「五、古人的UFO経験」で次のように述べておられる。

公元一〇七〇年、宋神宗熙寧四年十一月三日、名詩人蘇東坡被調離京師、任命為杭州通判、在上任途中、來到江蘇鎮江暢遊金山寺、当晚老僧請蘇東坡留宿、以便次日觀日出奇景、晚上就在江邊吟詩、沒想到看到了UFO、蘇東坡便將當時情形寫成詩、題為『遊金山寺』：

「……是時江月初生魄、二更月落天深黑、江心似有炬火明、飛焰照山樓鳥驚、悵然婦臥心莫識、非鬼非人竟何物：（自注：是夜所見如此）……」

西曆一〇七〇年、宋の神宗の熙寧四年十一月三日、名詩人蘇東坡は都を離れて杭州通判に任じられ、赴任の途中江蘇省鎮江で金山寺に遊び、夜になると老僧が、翌日目の出の奇觀を見られるようにと蘇東坡に逗留を勧めた。夜は河辺で詩を吟じたが、思いもかけずUFOを目撃し、蘇東坡はその時の様を詩にした。題名は「金山寺に遊ぶ」である。（以下引用詩）

熙寧四年が一〇七〇年とあるが正しくは一〇七一年。そして小論（其一）で触れた『呉友如画宝』の場合と同様、この呂氏の「UFO五千年史」という文章も中国の他の様々なウェブサイトにもそのまま引用されている。⁽²⁶⁾この蘇東坡詩をUFOと関連づける説は、インターネットの普及に伴って加速的に広まったということは言えよう。

ではこの説はさかのぼると誰が最初に唱えたのであろうか？ 西村康彦氏は著書『天怪地奇の中国』⁽²⁷⁾で蘇東坡詩を取り上げて次のように述べておられる。

六年ほど前のことになるが、上海の文学者である胡文柱氏が宋時代を代表する詞人、蘇東坡（一〇三六―一一〇一）の詩のなかで、永い間不可解な表現とされていた部分について、新しい解釈を発表した（『新明報』一九八八年五月十三日）。詩は、熙寧四年（一〇七一）につくられた「金山寺に遊ぶ」である。

二更、月落ち天黒く深まり、

江心に炬火の明りあるらし。

焰飛びて山を照らし、

原文ママ
栖鳥を驚かし、神、鬼ともつかず、

はた何物ぞ。

この詩句の結びの部分、「神、鬼ともつかず、はた何物ぞ」というくだりが問題になる。胡氏は、焰を吹いて山を照らし、鳥を驚かせて飛び去った神とも鬼ともつかない不思議なものを、UFO（未確認飛行物体）ではなかったかと推論した。

その証拠としたのは、蘇東坡と同時代の政治家であり科学者でもあった沈括（一〇二九―九三）が『夢溪筆談』に記録している不思議な飛

行物体で、蘇東坡は金山寺、沈括は揚州、同じ長江の流域で目撃したのであらうと述べている。ふたりは共に中国思想史、科学史に大きな足跡を残したひとびとである。ひとりは詩文に他は科学的な観察記録として、その体験を書きとどめたのであり、信憑性に疑いはない。

西村氏によれば蘇東坡詩を現代のUFOとしたのは胡文柱氏であり、さらに胡氏はこれと先の『夢溪筆談』を同じ長江流域の話として結びつけたということである。既に述べたようにこうした説が一度インターネット上に掲載されると、同様の興味を抱くウェブページの作者によって容易にコピー・転載されて広まってゆく。恐らくは最初は胡氏のように古典文学の造詣を生かしてこれを興味深く論じたものがあって、それがUFO研究者の間にそのまま広がっていったのであらう。

しかし意地悪を言うようだが、仮に「UFO」研究団体と同じくらい「人魂」^{ひとたま}研究団体や「不知火」^{しらぬい}研究団体がたくさんあって、そこがそれぞれウェブページを開設していたならば、この蘇東坡詩などは「人魂」や「不知火」の恰好の証拠としてもはやされていたことであらう。現在の所の蘇東坡詩が「UFO」であっても「人魂」や「不知火」ではない、とすべき論拠は何もない。蘇東坡の記述のみからすればむしろ「人魂」や「不知火」の方に歩があるくらいである（お断りしておくが私は人魂の存在を事実として認める、などと言うのはありませんよ）。考えるに、UFOは第二次大戦後になって成立した若い説話であり、天文学や科学技術などと（少なくとも表面的には）関連が深く、現在実際に愛好家が多い（中国にもUFO研究団体は幾つもある）。その一方、人魂や不知火は古くから知られた民間伝承或いは伝説に類するもので、今さらこれを科学的に説明して云々、ということは今日あまり話題にもならない（大槻義彦教授を除き……）。つまるところ蘇東坡詩が「人魂でも不知火でもなくUFOだ」と言える要因はむしろそうした力関係にあるのではなからうか。要するに「蘇東坡が見たのは人魂だ」と言っても今さら誰も納得しないが、「実はUFOだ」と言えば現代人にはそれらしく聞こえる、ということだ。

すると問題は、こうした説話がどのように成立してどのように広まったか、という人文科学的・社会科学的な面にこそあるように思えてくる。その意味では『新明報』の胡氏の文章は中国のUFO説話の成立を辿るための貴重な資料になるかもしれない。残念ながら『新明報』は私は未見であるので、さらに調査してご報告したい。（以下次号）

注

- (1) 「古代中国にUFOは飛来していたか? (其二)」——古典文献の基本的な使い方からの考察『中京大学教養論叢』第42巻第四号 二〇〇二年三月
- (2) 皆神龍太郎・志水一夫・加門正一共著『新・トンデモ超常現象56の真相』太田出版 二〇〇一年
- (3) 例えば『東西不思議物語』毎日新聞社 一九七七年 14「ウツボ舟の女のこと」 或いは『うつろ舟』福武書店 一九八六年
- (4) 文献的考証は言うまでもなく、実地の検証のため国内はおろかアメリカまで実際に çık かけておられるところなど、実に脱帽である。特に、私も子供の頃聞

いたことのあるアメリカの片田舎に出現する謎の怪光「マーファライト」が、何のことはない遠くの丘陵の国道を走る車のヘッドライトだった、という記事には爆笑してしまった。

- (5) 北宋沈括撰『夢溪筆談』卷二十一「異事」十三(第三六九條)
- (6) 王矛・王敏共著『中国文化故事物語』原書房 一九九〇年
- (7) 梅原郁訳注『夢溪筆談』1-3 平凡社東洋文庫(三四四・三六二・四〇三) 一九七八・七九・八一年 卷二十一「異事」は第二冊
- (8) 李文沢・呉洪沢訳『文白対照 夢溪筆談』巴蜀書社 一九九六年
- (9) 一五三頁、及び一六〇～一六二頁
- (10) TUFOA∨UFO研究∨『夢溪筆談』的神奇飛珠(原載於《時報周刊》第二五〇期)
<http://www.ufo.org.tw/study/fk93.htm>
- 作者の呂応鐘氏については後述。
- (11) 「正見∨宇宙時空∨古代科学∨湖上明珠・古代飛碟」
<http://zhengjian.org/zj/articles/2000/12/19/6059.html>
なお、碟は小皿の意。よって「飛碟」は「空飛ぶ円盤」^{フライングソーサー}の中国語訳である。
- (12) 「飛碟在中国(UFO in China)∨古代中国的UFO記録∨揚州明珠」
<http://www.sinote.com/ufo/ufoin.htm>
- (13) 中華書局拋道光二十九年刊本影印『輿地紀勝』(一九九二年)によった。
- (14) 軍は行政区名。県ほどの規模。
- (15) 梅原氏、及び胡道静著『夢溪筆談校証下』(上海古籍出版社 一九六二年)の注参照。
- (16) 例えば「孫莘老求墨妙亭詩」や「孫莘老寄墨四首」など。
- (17) 『文化故事』の『輿地紀勝』の注釈は
二百卷。内容は遊記、伝説、詩歌など。
となっているが、注としては不十分ではないか。土地にまつわる地誌、遊記、伝説、詩歌が土地ごとにまとめられているところに意味があるのである。また現在完本は伝わっておらず、欠葉・欠巻がある。詳しくは前掲中華書局影印本の解説を参照。
- (18) 小川環樹著『中国詩人選集二集5 蘇軾上』岩波書店 一九六二年
- (19) 『礼記』「郷飲酒義」に「讓之三也、象月之三日而成魄也」とある。魄については『漢詩大系 第17卷 蘇東坡』(集英社 一九六四年)で近藤光男氏は
魄とは月の輪郭がみえて光のない部分
或いは
地球照によって見える月の夜の部分
と注釈し、その天体写真を掲げておられる。
- (20) 但し、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳注『蘇東坡全詩集』(統国訳漢文大系 日本図書センター 一九七八年)では

ここは明月盡きた後、魄を生ずる。必ずしも月の三日をいふのではない。前月が、大なるときは二日に至りて魄を生じ、前月が小なるときは、三日に至りて魄を生ずる。魄とは、月の輪郭に、光の無き處なり。朔の後には、明生じて、魄は死し、望の後には、明死して、魄生ずるなり。と注しておられる。

(21) 『宋詩鑑賞辞典』上海辞書出版社 一九八七年

(22) 川口秀樹氏「中国学網頁搜尋器」プライベートページ／SFの書棚中国科学説話雑識2・附・謎の発光体」

<http://www.ne.jp/asahi/sinology/lib/private/sf/s2.html>

(23) このような千満差の大きい大河の河口域で発生する上げ潮の逆流現象は「海嘯」「潮津波」「暴漲湍」あるいは「ボア (bore)」と呼ばれる。

(24) ウェブページ「台湾飛碟研究教父呂応鐘」

<http://ufolu.writer.com.tw/>

によると、著書には『科幻文学概論』(共著)、『古籍科技思想』、『UFO五千年』などがあるが未見。同ページによると、「UFO」を「幽浮」と中国語に初めて訳したのは氏だそうである…。また川口秀樹氏の「中国科学説話雑識2」(既出)も呂氏の「UFO五千年史」を参考文献に挙げておられる。

(25) 「TUFOA」新客星站「幽浮・外星人」不明飛行物目撃記録「UFO五千年史」

<http://www.thinkerstar.com/ufo/ufo-5000.html#e>

(26) 例えば

「中華網」科技頻道「科学博覧」UFO難解之謎「UFO五千年史」

http://tech.china.com/zh_cn/science/zhuanti/ufo/lishi/89970/20010302/130711.html

「希網」網絡「科学・科技」別類科学「UFO五千年史」

<http://www.cn99.com/cgi-bin/getmsg?listname=world&id=5>

「大紀元文化網」文化網「大千世界」千古之謎「UFO五千年史」

<http://www.dajiyuan.com/djyculture/culture/gb/2000/11/9/2693.htm>

「探検倶楽部」UFO五千年史」

<http://www.geocities.com/Colosseum/Track/9165/t3.htm>

「115 捉鬼特攻小隊」UFO五千年史」

<http://www.geocities.com/Tokyo/Harbor/4766/ghostt.htm>

「天地」UFO「UFO五千年史」

<http://www.tiandi999.com/ufo/gsjl.htm>

「UFO研究」UFO国内目撃案「UFO五千年史」

<http://my.szptt.net.cn/jsufo/ufoan15.html>

など

(27) 西村康彦著『天怪地奇の中国』新潮社 一九九四年 第二十一章「そは何物ぞ」 原載：『芸術新潮』一九九〇年二月号、一九九二年三月号

(28) アメリカ・ワシントン州でケネス・アーノルドが光る物体を目撃したという一九四七年が、UFO元年ということになっている。これについては、アーノルドは問題の物体は投げた皿が水面を跳ねて行くような飛び方だったと述べただけで、物体が皿の形をしていたとは言っていない、というのが実情のようである。詳しくは高倉克祐著『世界はこうしてだまされた さらばUFO神話』(悠飛社 一九九四)、皆神龍太郎著『宇宙人とUFO とんでもない話』(日本実業出版社 一九九六)、と学、著『トンデモ超常現象99の真相』(洋泉社 一九九七年)などの解説を参照。

(前号目次)

- 一、諸葛孔明の死に際して現れたUFO? ——『晋陽秋』と『三国志』『晋書』『宋書』
- 二、南京で目撃されたUFOの図? 『呉友如画宝』『赤燄騰空』

(次号目次)

- 五、UFOにさらわれた中国人? 地方志の記述
- 六、付論：現代中国のUFO研究団体について

※ 小論は、平成十三年度に私が本学で行った「国際文化論Ⅳ」の講義録を素に発展させたものである。なお文中で取り上げた『天怪地奇の中国』については、本講義を受講された本学情報科学部認知科学科の黒田薫君が学期末に提出されたレポートに負うところが大きかった。黒田君は『天怪地奇の中国』の筆者は完全にUFOの存在を前提にしているわけではなく、解明できない謎を解く説の一つ、という立場を取っていると評しておられる。黒田君には特にこの場を借りてお礼申し上げたい。

また蘇東坡の「遊金山寺」詩に出てくる「海嘯」については、ウェブページ「Japan Marine Affairs & Comprehensive Ocean Dictionary」(<http://www.sainet.or.jp/~k-naka/index.html>)を主催される中内清文氏にeメールにより丁寧なご教授をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。